



親子が共に学び、災害において命を守る適切な行動ができる子供を地域で育む取り組み



北海道 帯広市親子防災講座実行委員会事務局
(帯広市総務部危機対策室危機対策課)
西澤 晶英

1 はじめに

帯広市は、北海道十勝平野のほぼ中心部に位置する人口約17万人のまちで、市内には40の小中学校があります。

帯広市では、市民の防災意識の啓発に取り組んでいたものの、子供を含めた幅広い世代層への啓発が課題となっていました。そこで、平成23年の東日本大震災を機に、地域の避難所となる学校を拠点として災害に備える意識を親子で学ぶことを目的として、平成24年度から帯広市PTA連合会と帯広市が主体となり「帯広市親子防災講座」を始めました。

2 自ら考え、体験する学び

災害への備えを学ぶことは、自分の命を守り、周囲にいる人の命を救う貴重な学びです。講座は、能動的な学びになるよう、主にクイズ形式で自ら考えて判断するものと、実際に手にとって体験するものなどを組み合わせて進行しています。災害発生時には正常性バイアスや同調性バイアスなどに陥ることなく迷わず行動することが大切です。このため、講座の導入として必ず緊急地震速報に必ず行動を確認しています。実施にあたっては、緊急地震速報音を鳴らして数秒後に揺れの映像を投影するなど災害発生時の混乱を再現し、緊張感を高める工夫をしています。

避難訓練などで子供たちは、机の下で頭を守ることを学んでいますが、そばに

机がない場合にはどうやって身を守るかをとっさに判断しなくてはなりません。小学校の高学年や中学生に対して実施してみると、はじめは周囲の顔色を伺って行動を起こしませんが、しばらくして誰かが動くと次々に行動する同調性バイアスの傾向が多くみられます。ところが、小学校の低学年だと迷うことなくすぐにその場で身を守る行動がとれており、幼少期における行動体験の重要性を再認識させられます。確認後には、揺れが起こった際に室内で何が危険なのかを指さし確認しています。

水害時の避難も考慮し、集団心理や身の回りに潜む危険を正しく理解して迷わず行動できるようにすることはとても重要だと思います。

避難所となる学校には自主防災倉庫がありますが、その中には何が入っているのかよく知られていないのが実情です。自主防災倉庫には災害発生時に使用するものがあることを知っておくだけでも必ず役に立つと考えていますので、展示して説明するととても関心をもって見聞きます。大ハンマーやバールなどの救助資材、発電機やし尿処理剤の使用法、担架を使った搬送方法などの体験も実施しています。この際、カードゲームの「なまずの学校」や「防災かるた」を実施し、防災資機材について学んでから説明することで、理解がより深まるように工夫しています。

その他、学年や講座時間に応じて段ボー



緊急地震速報に応ずる行動



防災ゲーム「北海道D○防災かるた」



搬送方法



段ボールベッドの作成

ルベッドの作成や非常食の作成・試食、新聞紙スリッパ等の防災工作、液化化や雲の発生などの防災気象体験などを取り入れています。

3 感心させられた子ども達の意識

緊急地震速報に応ずる行動を確認した時に、持参してきた防災ずきんで頭を守っている児童や、ハザードマップを紹介した時に市が発行しているハザードマップを持参してきた児童がいました。また、中学生を対象に実施した避難所運営ゲームでは、限られた数量のストーブの設置場所を2時間ごとに移したり、具体的な換気方法を定めるなどの柔軟な発想にとっても感心しました。

4 おわりに

平成24年度は小中学校40校中8校での実施でしたが、推進員の配置や帯広市ふるさと教育への防災教育の導入などもあり、令和2年度末には市内全小中学校での実施を達成する見通しです。中には複数の学年での実施や1日6時限の全てを活用した講座の実施もみられ、これまでの関係機関や学校、地域の理解や協力が実を結びました。

今後も、講座を通じて災害発生時には自分の身は自分で守り、周りに手を差し伸べることのできる意識づくりに努めます。